

敗戦後の志賀直哉

- 「特攻隊再教育」から「閑人妄語」まで-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部文芸研究会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18169

敗戦後の志賀直哉

——「特攻隊再教育」から「閑人妄語」まで——

宮 越 勉

はじめに

敗戦後の志賀直哉は、政治的、文化的な発言、提言を思いのほか多く行なっている。その主なものを挙げれば、戦争を二度と起こさず、この敗戦体験を永く記憶にとどめるために、いわば負のイメージとしての東條英機の銅像を造ったらどうかとしたこと、天皇制は廃止すべきだが、天子様と国民の古くからの関係を考えると天皇のあり方は新憲法に期待したいとしたこと、四十年近い作家活動で自分は日本語の不完全さを痛感して来たの

で、尺貫法に慣れている自分らの世代の為ではなく、尺貫法からメートル法を難なく受け入れた自分の子供たちの世代は小学校の教育（算術）が如何に容易になったかも考えると、今度は自分の孫たちの世代の為に、すなわち日本の百年後、二百年後を考え、日本が文化国家としてある為にはこの際、国語を根こそぎフランス語にしたらどうかと提言したこと、科学の無制限な進歩は人類をかえって不幸にする、他の動物たちより人類が先に滅びるのではないか、それを防止する為に科学の進歩に或る制限を設けてはどうかとしたことなどである。敗戦後七十年を経過した現時点で、これまで研究の俎上にあまり

載ることのなかった上記の志賀発言の多くは見直されていいのではないかと考えるようになった。小説を芸術としてその作家活動を貫いて来た志賀直哉であるが、敗戦後の混乱のなかでの思索、いやそれは戦時下での数々の思いから断絶することなく考えられて来たことと思われるので、これらの志賀の政治的、文化的な発言、提言を再検討してみる必要性を感じたのである。

—

志賀直哉の敗戦後における政府への最初の提言は「特攻隊再教育」(『朝日新聞』(「声」欄)、昭20・12・16)といえるだろう。以下、要点が伝わるようにその内容を紹介したい。

特攻隊として、予科練習生時代から特殊な精神教育を受けて来た青年達を、そのまま復員させてしまつた事は、政府として、無責任極まる措置であつたと思う。「終戦間際の彼等の飛行基地での生活の有様は、例外もあると思ふが、初め頃の特攻隊の生活とは大分変つて来たやうな話も聞いた。彼等が戦争以外の事、例へば人生問題とか、家郷の事とか、さういふ戦争に関係ない事柄に一切

頭を向けないやうに飲酒と女遊びを隊長達は寧ろ勧めてゐたといふ話を聞いた。もし事実とすればさういふ悪い習慣を身に着け、復員した青年達が今後どういふ事になるか(傍線は引用者・以下も同様)と寒心に堪えぬものがある。今でもすでに「特攻隊くづれ」などという言葉が出来ている。この戦争で日本が殺した青年の数は実に大変なものだ。政府は今いる青年達の中から一人でも多く有為な人物を作り出すことに努力する責任がある。復員した特攻隊員の「その心境を青年らしい健全なものに還す特別な教育をもう一度やる責任が政府にはあると思ふ。よろしく、文部省と復員省とは速にさういふ学校を設け、彼等の頭を完全に切りかへる工夫をすべきだ」としたのである。

右の提言は、幣原喜重郎内閣政府、海軍省と陸軍省が昭和二十年十二月一日に廃止され、それと同時に新設された第一復員省、第二復員省(大臣は幣原首相が兼務)と文部省(大臣は前田多門)に向けたものと読み取れる。が、志賀は、終戦間際の特攻隊の生活実態、とりわけ「飲酒と女遊びを隊長達は寧ろ勧めてゐたといふ話」、特攻隊員に「悪い習慣」を身につけさせた軍部、その情報はどこから「聞いた」のかが気にかかった。少なくとも私

には初耳のことで、もしこれが事実とするなら、志賀が特攻隊員として死なずに済んだのはよいが復員後のことが大変、社会への悪影響が懸念される、なんとか政府の責任で復員した特攻隊員たちを「再教育」し、その心境を「健全なものに還す」必要があるとするのは至極当然のものとなるからである。

まだ戦時下の昭和二十年初頭からさらに敗戦後までの志賀直哉は、加瀬俊一（近衛文麿の元秘書で、小磯内閣で外務大臣をしていた重光葵の政務次官を務めていた）が山本有三と話し合い、谷川徹三の協力を得て、西田幾太郎、安倍能成、武者小路実篤、和辻哲郎、富塚清、田中耕太郎とともに「三年会」（外務大臣官邸のあった麹町三年町にちなんだ命名）のメンバーの一員として敗戦後の国内混乱防止について話し合う懇談会（のち「三年会」は会員を増やし「同心会」となる）に参加していたのだった。昭和二十年の手製カレンダーに書き込んだような志賀日記を通読してみると、しばしば志賀の自宅のあった世田谷新町でもこの懇談会が頻繁に行われており、志賀の熱心さがうかがえる。よって、重光葵（昭和二十三年三月十五日の志賀日記に「五時三年会」）「外相招待」の記事が見られる、さらに昭和二十六年五月十二日の志

賀日記によれば、この日鎌倉で「元の外相重光葵を招く寄合ひ」があり、志賀ら旧三年会のメンバーが「広田元首相の死刑の原因となつた国策要綱の話、スエーデン公使が和平交渉に起たうとした話等」を聴いている、もしくは加瀬俊一（昭和二十年十一月十四日の志賀日記に「十一時半加瀬」の記事が見られる）、あるいは「三年会」の誰かからなど、終戦間際の特攻隊員の生活実態の情報を「聞いた」のではないかと推測されるのである。

そして、現に、帰還した特攻隊員の世間からの風当りはよくなく、その鬱憤から喧嘩などを起こす、「すさんだ生活をしていた」という帰還した特攻隊員の証言、戦中の彼らへの讚美から戦後のあまりの相違から犯罪に手を染めたという新聞報道、まさしく「特攻くずれ」という言葉が流行していたのだった。¹⁾

が、志賀のこの提言が実現されたとは聞かない。当時の政府にそれだけの配慮、政治力も経済力もなかったのだろうが、敗戦後混乱の中で復員した特攻隊員の生活実態は、その悪い面の一部が新聞などで報道されることはあってもそれは氷山の一角、今や風化されたものとなっているのではないかと思われる。

次の志賀の政治的、文化的発言として「銅像」(『改造』昭和21・1)が挙げられる。これを仔細に読めば、これまで奇抜な発言と見られてきたものの、志賀の歴史認識、反戦思想、平和主義などがよくうかがえるものとして重視したいと思う。また、この随筆を三段に分けて読むと、志賀の論理展開が意外にも卓抜なものであったことに気づくのである。

志賀は、川路聖謨(江戸時代末期の幕臣で外交家)をゴンチャロフ(ここではガンチャロフと表記)の「日本渡航記」で初めて知り、この人に興味を持ち、聖謨の孫にあたる川路寛堂編述の「川路聖謨之生涯」を終戦少し前の戦時下を読んで、「実に理想的な官吏とし、その立派な人物に感服した」としてこの随筆を起筆している。志賀は、聖謨が今から百六年前の天保十一年に佐渡奉行に赴任したところに注目、庁内を巡覧して、「西洋人襲来の時、民兵の用ゆる備そなへの由にて、いつ頃より出来しや、竹槍たけやり数百本あり、これにて凡おほぼほのこと、おし量るべきなり」と呆れていたのだが、終戦直前の頃に、寺の庭に女

を集め「竹槍」の稽古をしていること、落とし穴を作りその中に「竹槍」を植えつけて置くなどの話を聞き、「二世紀前の聖謨が呆れた事以上の事を今の若者達が黙々としてやらされてゐたのだ。しかも此時、米国では既に原子爆弾が成功してゐたのだから、彼我の戦力には話にならぬ差が出来てゐたわけだ」としている。川路聖謨は大体において官吏としての忙しい生活(時々意見はまめに建白書として老中に差し出している)を続けていたが、当時の文化人である林述斎、佐藤一斎、藤田東湖、渡辺華山、横井小楠、佐久間象山、間宮林蔵などと交流があり、先輩では広瀬淡窓を日田に訪ね敬意を表したりして、「文化人臭のない文化人」であったと話を進めている。こうして、その聖謨が秀吉の朝鮮征伐を評し、「太閤たいかう様程の人でも、あれだけの犠牲を払ひながら、掌程てのひらの土地も得てゐないではないか」と云つてゐる。これは達見である。吾々の子供らしい英雄崇拜は秀吉が明まで攻略しようとした、その雄志を讚美し、多くの犠牲を払ひながら遂に掌程の土地も得られなかつた愚笨おろちをこれまで愚笨として考へなかつたのは何といふ変な事だらう。吾々は学校の歴史でさう教へられなかつたのだ」と述べている。ここは重要で、志賀は子供の頃からの学

校の歴史教育で豊臣秀吉を英雄として教えられて来たことに怨嗟の思いさえ抱いていると思われる。これは、歴史は子供たちへの教育でいかようにもなるという重大な発言であったともいえるのだ。ともあれ、聖謨は、「極端に外国と事を構へるのを恐れ、それを避けようとした」人、つまり外臣にはうまい外交交渉をしたこと（現に聖謨は露使プチャーチン（ここでは布恬廷と表記）と外交談判をし、ゴンチャロフが聖謨に好意をもって書いていくとする）、さらに秀吉の侵略の戦争を認めなかったこと、それ故に聖謨を「実に理想的な官吏とし、その立派な人物に感服した」、その真意を知ることとなるのである。

第二段として、「川路聖謨之生涯」を読んだあと、偶然メレジコフスキー（ここではメレジコウスキーと表記）の「ナポレオン」を読み、ナポレオンは「戦争程醜悪なものはない」と感じるが、すぐ次の戦争を計画している、「征服は彼の三つ児の魂なのである」としてあることから、志賀はナポレオンを「世界統一を理想といふべきか我望といふべきか、ヒットラーの場合も同様だが、我望が本態で理想はその衣に過ぎないと私は考へる」とする。つまりナポレオンとヒットラーが同類の者となり、「此

世に送られた大きな悪魔」といい、先の豊臣秀吉と繋がる人物として、学校の歴史ではそう教えるべきだというのである。さらに田中耕太郎から聞いた話として、南米パラグアイの「ローペスといふナポレオン崇拜の皇太子」が仏蘭西留学後に王となって近隣の国々と戦端を開き、パラグアイの人口を四分の一の老幼ばかりに減らしたにも関わらず、何十年か経ちこのローペス王の「銅像」を建て、その武勇を讃えていることを書いている。これを志賀は歴史の不可思議さのように「咽元過ぎれば、の譬への如く、国民は何十年かの間に熱さを忘れて了つた」のだとする。ナポレオンの場合も同様で、後でフランスは彼を自慢の種にしているのは不思議なことだ、としている。ナポレオンという悪魔、それを崇拜したパラグアイのローペス王、「咽元過ぎれば熱さを忘れる」の譬えのように、歴史は、これらの人物を英雄とし、その「銅像」まで建つ、それを嘆きながらも綴っている。このようにして、他国の侵略者、征服欲にかられて戦争を起こし、多くの犠牲者を出した秀吉、ナポレオン、ヒットラー、パラグアイのローペス王が同類の者となるのだが、歴史とは奇妙なもので、咽元過ぎれば、つまり時の経過で、ある者は英雄となって甦り「銅像」さえ建てられる、こ

うして次の志賀独自の提言、主張へと繋げるのである。

第三段は、「扱て、我が国でも百年、二百年経ち國民が咽元の熱さを忘れた時、どんな歴史家が異をたてて、東條英機を不世出の英雄に祭上げないとは限らぬ。東條は首相の頃、「自分のする事に非難のある事も承知してゐる。然し自分は後世史家の正しい批判を待つよりないと思つてゐる」かう云つてゐたと云ふ。その後、新聞で、同じ事を云つてゐるのを読んで、滑稽にも感じ、不愉快にも思つた。吾々は秀吉の愚挙を漫然壯図と考へたのだから、西は印度、南は濠州まで攻め寄せた戦争を、その結果を忘れて、自慢の種とする時が来ないとは云へない気がする。自慢の種にするだけなら差支へないが、第二の東條英機に出られるやうな事は絶対に防がねばならぬ。」
とい、「この予防策として、東條英機の大きな銅像、それも英雄東條英機ではなく、今、我々が彼に感じてゐる卑小なる東條英機を如実に表現した銅像を建てるが、いと思ふ。台座の浮彫には空襲、焼跡、餓死者、追剥、強盗、それに進駐軍、その他いろ／＼現はすべきものがあらう。そして柵には竹槍。かくして日本國民は永久に東條英機の真実の姿を記憶すべきである」(傍点は志賀)としたのだった。

敗戦直後の志賀直哉は、「百年、二百年」先を考える発想を持っていた。戦時下のいわば空気を殆ど知らない私は、志賀が東條英機をどう見ていたかが問題だと思ふのだが、とりわけ太平洋戦争において多くの犠牲者を生じさせた「此世に送られた大きな悪魔」のように、すなわち戦争責任者の筆頭としていたことはこの隨筆の筋道からして間違いないところである。保坂正康によれば、その詳細には触れないが、東條英機は近衛文麿内閣のあと、新聞で「生まれよ、強い内閣」と期待されているなかで、昭和十六年十月十八日に第40代内閣総理大臣に就任、軍部の内部抗争があるものの、首相兼陸相、精神力での戦争勝利を鼓舞し、昭和十九年には正式に参謀総長に就任、「統治権」と「統帥権」を兼ねるといふ明治憲法に反することを成就して、「東條幕府」とまでいわれた、いわば独裁者的存在であった。対米英戦争の初期は英雄、敗戦色が濃くなつて敗戦に至り自殺未遂、一般的な東條英機観としては、英雄の座から落ちた反英雄、志賀は豊臣秀吉と繋がる人物、さらに言えば、ナポレオンやヒットラーのような「此世に送られた大きな悪魔」と認識していたに相違ない。そして、敗戦後の志賀は、この戦争の悲惨さを忘れないために、あるいは第二の東條

英機の出現を防ぐ「予防策」として、東條英機の大きな銅像を建てるのがよい、それだけではない、「台座の浮彫には空襲、焼跡、餓死者、追剥、強盗、それに進駐軍、その他いろ／＼現はすものがあらう。そして柵には竹槍」を、と提言したのである。「竹槍」に始まり「竹槍」に終わるこの文章のレトリックは卓抜なものを感ぜさせる。

だが、志賀のこのような提言は、志賀自身も実現可能とは思ってはいなかっただろう。とはいえ、この文章は残る。志賀の歴史観としては、豊臣秀吉、ナポレオン、ヒットラー、そして東條英機は、人間の戦闘本能から戦争は繰り返して起こる、その戦争を鼓舞する東條のような「大きな悪魔」は「百年、二百年経ち国民が咽元の熱さを忘れた時」に英雄として甦る、というもので、これは悲しいかな、正鵠を射たものだったように思える。恒久平和、再び悲惨な戦争をしないためにはどうすればよいのか。平和・反戦教育、継続性のある平和・反戦市民運動などを実践していくしか術がないように思われる。

三

随筆「鈴木貫太郎」〔『展望』、昭21・3、原題は「新

町随筆〕は、志賀が鈴木貫太郎さんに一度も会ったこととはないが、世間より私がよく知っているのではないか、鈴木さんが終戦に如何に心を砕き、ようやくここまで漕ぎつけたのではないかと思われる節があるので、「他から聞いた事、更に又聞きなど」から鈴木貫太郎さんのことを書いてみようとしたと、その冒頭部で述べている。

志賀が鈴木さんの名を知ったのは、「今から二十五六年前」のこと、「四つ上の叔父」(志賀直方)が大内田盛繁さんという退役の海軍少将を連れて遊びに来た時のことだったという。志賀日記の大正十一年七月二十日に「午后直方氏 大内田氏と二人で来る、／＼絵や陶磁器等を見せる、／＼夜 戦の話をきく、鈴木カン太郎といふ海軍軍人を大内田氏讃めてゐる」とあり、この日のことを指すとしていい。その際、大内田さんは、日本海海戦の話を始め、自己陶酔の有様で話し、自分の司令だった鈴木貫太郎さんを褒め、もし日本が次に戦争をする場合、「東郷さんの地位に坐る人は此人以外にはない」と言っていたが(志賀は当時内村鑑三先生の影響で戦争は極端に嫌いであった)、何の反感も起こらず、寧ろいい感じで聞き、鈴木貫太郎という名前を覚えた、というのである。

その後、鈴木さんが海軍大臣の交渉を受けたが断わつ

たというような話、仕舞いに侍従長になり寧ろ側近の重臣として最も適任の人という気が漠然とではあるがして来たこと、二・二六事件では幸いに負傷だけで済み、やがて枢密院副議長、そして議長になった、と記す。また、「七八年前」に志賀が奈良から出て東京の高田馬場の借家に住んでいた頃、家が狭いので何処かいい家があれば移りたいと思っていたら、網野菊子さんが西巢鴨にある知っている人の家に案内してくれたが、そこは偶然にも鈴木貫太郎さんの息子さんの家での折のことを挿入回想している。網野さんは鈴木貫太郎さんの息子さんの夫人と同窓だったのだが、やがて網野さんからの情報で、対米英戦争が始まってマレー半島からシンガポールへ日本軍が破竹の勢いでなだれ込んだ頃（戦況の最もいい時）、鈴木貫太郎さんは「日本が此戦争に勝つても、負けても、三等国に下る」と家人に言っていたというのを聞き、志賀は「異様」に感じたという。しかし、鈴木さんはこの戦争を初めから避けたいと思っていたのだからとも考えた。こうして、鈴木さんが総理大臣になった時、「これは屹度、此内閣で戦争は終るのだらうといふ風に私は思つた」としている。

今志賀は世田谷区新町に住んでいるが、鈴木さんが組

閣を急いでいる日に、近所の長尾欽弥氏の家に招かれた、そこで近衛さん（近衛文麿）と一緒にになり、志賀はこの内閣で戦争は終わるのではないかと訊いてみたら、近衛さんはそれをはっきり否定し、発足に軍部の要求（本土決戦の事）を入れたのでそう寿命は長くはないと言うので、腑に落ちなかったという。先の鈴木さんが戦争の初めに「これで日本は三等国に下る」と言ったことと、軍部の要求する本土決戦を約束して内閣を引き受けるのは辻褄が合わないと思ったのだった。鈴木さんは小磯（呼び捨てにしている）などのように総理大臣になりたくてうずうずしていた人でないので、何か考えがあつてのことかとも思ったが、専門家の近衛さんがそういうのならそんなものかと思つたとする。しかし、それからの新聞の調子を注意していると前とは大分變つて来た。ドイツの敗戦で、ベルリン市民が明朗になったという朝日の守山特派員の記事などはそれまでには許されなかったものだったという。

六月初め志賀は福井、信州高遠、奈良などに十日ほどの旅行に出たが、旅行中、戦争の続行はただ奈落の底に落ち込むばかりで、政府の方針は屹度終戦に決っているに違いないと思ひ込んでしまった。が、旅行から帰って

聞いた話は予想とは全く反対で、東條（これも呼び捨て）、小磯、鈴木首相の三人が強硬に本土決戦を主張しているとのことであった。

広島原子爆弾と露西亜の参戦以後の憂鬱さ加減は嘗て経験した事のない気持だった。八月十二日の午前、谷川徹三君が来訪し終戦に決ったと知らせしてくれ、午後には近所に住む後藤隆之助君が同じことを知らせに来てくれた。が、十三日には敵の艦上機が盛んに飛び廻るので、後藤君に訊きに行くと前日とは話が全くひっくり返ったという。ひっくり返した者に対する怒りに燃えた。十四日、近衛さんに近い児島喜久雄を訪ねると、徳川侍従からの情報で終戦に決ったがアメリカとの手続きでそれが一週間ほど先になるという話だった。その午後、後藤隆之助君の息子が親爺の使いとして来て、今日、御前会議で無条件降伏と決まったと報告した。感動した。鈴木さんの家は焼かれたが、暴徒の来る十分程前にそこを立ち去ったと、あとで網野さんから聞いた。結局、軍部（陸軍）が強く、二・二六事件あたりで抑えておけばよかったものを、それが出来ず、雪達磨は加速度的に大きくなり、ついにどうしようも出来なくなると志賀は見ている。鈴木さんは、軍の要求を撥ね退けての組閣は出来な

い、表面上の「カムフラージュ」、それが鈴木さんの「腹」で、東條や小磯は鈴木さんに背負い投げを食わされたのだと思った。少しでも和平を臭わせれば、軍は一層反動的になる。鈴木さんは「真意を秘して」、終戦という港にこのボロボロ船を漕ぎつけたのである。鈴木さんは自刃されると志賀は思ったが、天子様に対する忠義心から再び枢密院議長に坐り、ひと頃、遷都の噂もあつたが、また軍部が陛下を錦の御旗とし、何所までもお連れする恐れがあるので鈴木さんは絶対にこの事に反対だったという。鈴木さんについて二十五六年前、大内田さんの言った言葉は思いがけない事で矢張りの中したと言えると結んでいる。

今、私たちは、半藤一利の『日本のいちばん長い日 決定版』（文春文庫・文藝春秋、二〇〇六・七）などで鈴木貫太郎の特異な政治力を知ることが出来るが、志賀は終戦後数ヶ月の時点で、昔の回想や近時の周囲からの情報などをもとに、鈴木貫太郎の人物、その特異で功ある政治手腕を書いていたのである。これは高く評価していい随想だと思う。

四

志賀直哉の「天皇制」(『婦人公論』、昭21・4)は、短文ながら重要な問題を内包したものとと思われるので全文を引用し掲げたい。

今度の戦争で天子様に責任があるとは思はれない。然し天皇制には責任があると思ふ。

天子様の御意志を無視し、少数の馬鹿者がこんな戦争を起す事の出来る天皇制——しかも、最大限に悪用し得る脆弱性を持った天皇制は国と国民とに禍となつた。

天子様と国民との古い関係をこの際捨て去つて了ふ事は淋しい。

今度の憲法が国民のさういふ色々な不安を一掃してくれるものだと一番嬉しい事である。

然し、世界各国の君主が老人の齒が抜け落ちるやうに落ちて行くのを見ると、天皇制といふものが今はさういふ年齢に達したのだといふやうにも感ぜられる。

天子様と天子様の御一族が御不幸になられる事は実

にいやだ。

この問題が穏やかに落ちつくところに落ちついてくれるといいと思つてゐる。

ここで志賀が「天皇制」(天皇||君主、主権者)と「天子様」(天皇個人)とを概ね分けてその意見を述べていると読み解かねばならない。「天皇制」は廃止の方向でいい。だが、「天子様」(天皇)とその御一族が不幸になることは嫌だ。この問題については「今度の憲法」にある程度期待をかけていると読めるのである。また、「少数の馬鹿者」が軍部を指していることはいうまでもない。

ここで、昭和初年代から日本が軍国主義を強めて行つた時期に、志賀がどのような思いでいたかを探ってみた。

未定稿29で、志賀は「自分は自分の国を愛する点で、人後に落ちないつもりであるが、近頃のやうな世相の中では愛国者と自ら名乗る事は、寧ろ穢らしい感じさへする」とし、命を惜しまず戦争をすること、あるいは無辜の民をして戦争せしむることだけを愛国者であるように考えている「軍部」を批判し、「近頃の所謂軍部とい

ふものの威張りやうは甚だ不愉快だ。日清、日露、両役の前後にも軍人は威張つたが、子供らしい無邪気な所があつた。一般の考へも今とは異つてゐたから、威張つても不服を感じずる者は少なかつた、所が今度の場合ではそれが変に人をおどしてかゝる」と書いている。志賀全集の「後記」で紅野敏郎は「文中のことはより満州事変につづく、昭和七年の上海事変以降のものとなる。軍部に対する強い批判がここに述べられている」としている。

未定稿21（昭和八年二月十四日執筆）で、志賀は「人間といふものが如何に愚劣なものかといふ事が近頃妙に痛感される。国際聯盟に対する日本政府の態度の如き、如何に愚劣さを暴露してゐるか、日本が本統に正しければかういふ結果には決してならぬ、馳引き、強がりのやり損ひである。軍部なるものが日本の国内の輿論を支配したやうに世界の輿論を支配出来ると思つた事が間違ひである」、「又近頃の所謂右傾にしても皇室なるものが、何故、それ程に絶体なのか、誰れにも腑に落ちるだけに説明する事が出来ないくせにそれを強いる」と批判するものの、「厭世的悲觀的」になり、「家族共々ヌエーデンへでも移住したらといふやうな空想をしてゐる」としている。

草稿49「荆棘の冠」序 青臬帖 身辺記」は、二・二六事件（昭和十一年）に関する志賀の反応を書きつけていて重要であり、二ヶ所から引用しておきたい。

○二、二、六事件は近頃稀れなる不愉快な事件だ、五十年の自分の生涯で最も不愉快な事件であつた。

彼等は国躰明徴を口にして所謂君側の奸たる重臣を殺し、天子を自分等と同じ考へにしようとしたのだ。

此事が既に天子の人格を認めない事であり、天子を機関以上には考へてゐない証拠である。

所で所謂君側の奸を殺して見たが、天子は自分達の思ふやうにはならなかつた。天皇が機関以上の働きをしたわけである。（以下略）（六月六日）

○今度の事件で自分は天子様の氣持を察し、涙が出た。これは自分としては実に思ひがけない事であつた。自分は天子様を個人的に尊敬しなければならぬ理由を知らない。奈良県の知事を尊敬しないやうに尊敬してゐないつもりであつた。

所が今度の事件で自分は堪らない程天子が御氣の毒になり、涙が出さうになる。伝統的な考への力の恐し

さを想った。

それは別として今度の事件で自分は天子様が偉かつた話を聞き感服した、伝統的の偉さといふものが矢張りある事を感じた。自分は天子様を愛する 残り少ない世界の天子のうち最も勝れた天子であると思ふ。吾々は仕合わせだ。

(六月六日)

二月二十六日の陸軍皇道派青年将校たちによるクーデターを耳にした天皇は、暴徒を鎮圧せよ、馬を用意させ自ら鎮庄に出掛ける意思表示さえ示したという。志賀は六月になってこの事件における天皇の振る舞いを誰かから「聞き感服した」のだと思う。それまでは、天皇の「人格」を認めない、天皇を「機関」以上には見ていないことに反感を覚えていたものの、「奈良県知事を尊敬しないやうに尊敬してゐないつもりであつた」のである。この草稿で「天子」が「天子様」に微妙に変化していることに、天皇を尊敬するようになった経緯が読み取れるであろう。

だが、歴史の奇妙なところで、陸軍統制派にいた東條英機は、この二・二六事件がその人生を大きく変えることになったのである。やはり天皇は「機関」以上のもの

でなかったといえるのだが、それはこれまでの日本史研究で私たちが理解しているものに過ぎないとせねばならない。戦時下を過ごした志賀らのことに想像を働かせねばならない。やがて太平洋戦争に突入し、日本人がほぼ一丸となって戦争に突き走っていた時期に、志賀は「シンガポール陥落」(『文芸』、昭17・3、同誌には谷崎潤一郎の「シンガポール陥落に際して」も掲載されていた。なお、谷崎(2・16)のも志賀(2・17)のも日本放送協会・JOAKよりラジオ放送されたものである)という志賀唯一の戦争協力(アメリカ大統領の無礼さ、イギリスのチャーチルの威嚇的宣言に腹を立てたが、この光輝ある戦果のうちに「天祐」を思い、「謙讓」な気持を持ち続け国内よく和していこうという内容のものであった)の文章を発表したのである。

吉田濶生は「シンガポール陥落」に天皇の神格化や皇国史観などのウルトラ・ナショナリズムがあるわけではない。「軍への賞讃が少ない」、「海軍軍人志望であつたという」志賀の「無意識のうちの一時的な幼児帰りと見てもよい」としている。なお、志賀のものばかりが取り上げられ批判を浴びるのだが、谷崎の「シンガポール陥落に際して」は、「皇国」が四回、「皇軍」が三回使用

され、「豊大閣」や「真如法親王」（高岳親王）などの導きで「大東亜解放」のための「シンガポール陥落」を「聖戦」と見る基調のものとなっていたのである。

ところで、志賀と谷崎はいかなる経緯でラジオ放送をすることになったのであろうか。想像するに、これは実は当時独裁者的存在になっていた東條英機の意を受けた「軍務局」の、当時の文化人たちへの巧妙な働きかけによるものであったのではないかと思われる。志賀の唯一の汚点でありのちに深く反省をしていたと捉えたい。そして戦況の悪化に伴い、志賀は、やはり「天子様」はその「人格」が認められず、「少数の馬鹿者」に「最大限に悪用」されてしまうと、そういう「天皇制」をこそ廃止しなければならないと次第に思うようになっていったのだと思う。敗戦後においても、昭和十一年に耳にした二・二六事件に際しての天皇の振る舞いだけではなかったのはむしろとして、志賀に天皇を敬う気持ちは持続し、「天子様」といい、天皇およびその御一家の今後のあり方を心配し、これは「新憲法」に期待を寄せようとした、というふうには私は「天皇制」という短い随筆を読み取るのである。

なお、福永文夫によれば、各党の新憲法草案での「天

皇制」については、進歩党と自由党は「存続（国体護持）」であり、社会党も「存続」（ただし党内にかなりの振幅があり森戸辰男は「天皇はわずかにモラル・シンボルとならねばならない。天皇の地位はイギリスやスカンジナビアの王のそれに近いものでなければならぬ」という意見を持っていた）で、共産党のみ「廃止」、GHQ草案は「存続（象徴天皇）」であった、というのである。

その後、多少の紆余曲折はあったものの、日本国憲法は、昭和二十一年十一月三日に公布された。主権は国民、天皇は象徴と位置づけられ、戦争放棄、基本的人権の尊重が柱となる大転換となったのだ。志賀の「天子様と国民との古い関係をこの際捨て去つて了ふ事は淋しい」という懸念は、象徴天皇ということで、一応の安堵感を覚えたに相違ないと想像される。

この志賀の「天皇制」というごく短い随筆から、私は藤枝静男の「志賀直哉・天皇・中野重治」（『文芸』、昭50・7）を何度も繰返し読んで、志賀直哉が、野上弥生子や広津和郎とともに蔵原惟人や中野重治や宮本百合子らの「新日本文学会」（昭20・12・30創立）の賛助会員となった一因（その最大のものには戦後の文学活動だろうが）に、「新日本文学会」が「天皇制」に関し

「廃止」の趣意を持ちそれに同意する気持ちがあったからではないか、と考えられるのである。が、志賀は、中野重治の「安倍さんの「さん」」(『読売新聞』、昭21・3・11)と「新人会の思い出」(『東京新聞』、昭21・3・10および12)を読み「不愉快」を感じ、「君が正直に書いてゐるのか或る成心で書いてゐるのかききたいと思ひます。何か復しう心のやうなものも感じられ兎に角甚だ不純な印象を受けました」といい、中野らに「純粹に文学的なもの」を書くよう寄稿を頼まれていたものは幸いにも「随想」(『新日本文学』、昭21・4)として書く気になつたのでそれは送るが、会は脱会する、と中野重治に宛て書簡(昭21・3・11(速達))を出したのだった。中野は「私はあれを成心をもつては書きませんでした」、「脱会のことは、もう少し待つて頂けぬでせうか」などと書いた書簡(昭21・3・14(速達))を出している。中野を庇う徳永直からの志賀宛書簡(昭21・3・13(速達))もあった。が、志賀は、徳永に勧められ中野の「暗夜行路」雑談」を読んで見たが半分程で読むのをやめ「小説を中野君のやうな態度でしか見なければならぬといふ事は不幸だと思ひます、全体が分つてゐて云つてゐると思はれません」などとし、「例の会は矢張り

退会します、結局水に油だと思ひます」としたのであつた(志賀から徳永への書簡・昭21・3・16(下書き))。また、藤枝静男が賛成した平野謙の「中野重治と志賀直哉」(『展望』、昭49・10)を読んでみた。私流に平野論文を要約して書くと、平野謙は中野重治の戦後の第一作である「五勺の酒」(『展望』、昭22・1)について、この作の「ライトモチーフは中野重治自身のひそかな自己批判にあるということであり、その自己批判を形成するひとつのきっかけとして、志賀直哉の手紙がなほどうか作用をおよぼしたのではないのか」、「五勺の酒」は難解な作品であるが、その主題として「個としての天皇を天皇帝の枠から解放せしめよということがあり、そのことを民族道徳樹立の要めにせよということがあり、と云つていいだろう。そして、天皇個人と天皇帝とをハッキリ区別したところに、『五勺の酒』のまぎれもない独創がある、といえるのではないか」といい、さらに「天皇帝という言葉が一般に流布したのは、三十二年テーゼ以来のことだ」、「この天皇帝という言葉に、私どもは天皇、皇室、皇族すべてを含ませたということだろう。いきおいそれは抽象的・一般的なものたらざるを得なかつた」としたのである。「五勺の酒」を私なりにじっくり

と読んだ限りでは平野謙の見解は概ね正しいように思われた。

ともあれ、志賀の「天皇制」という短い随筆は、「天皇制」と「天皇」（天子様）を区別してのものであった。「天皇」を主権者としては、「少数の馬鹿者」により「最大限に悪用」される可能性があり、戦争を起こし「国と国民とに禍」になる、故に、むしろ廃止した方がいい、だが「天子様と天子様の御一族が御不幸になられる事は実にいやだ」という志賀自身の偽らざる思いなどが吐露され、「今度の憲法が国民のさういふ色々な不安を一掃してくれるものだ」と一番嬉しい事である」としたのではないか、私はそう読むのである。

五

私は、志賀の数ある敗戦後における政治的、文化的提言のなかで、「国語問題」（『改造』、昭21・4）を、今日の観点から見ても最重要視したいと思う。が、この「国語問題」は今日まで国語学者、言語学者などから批判され、殆ど評価されて来なかった。それは、この文章が内容的に長大論文とならねばならぬ性質のものに関わらず、

説明不足、具体性に欠ける憾みがあり、説得力を持たなかったためだと見る。そこで、これに関連する志賀の随筆、座談会記事などを援用し、志賀の国語フランス語化の主張を精細に考察したいと思うのだ。

まず「今程厳しい時代を日本は嘗て経験した事がない」と起筆され、「茫然自失の虚脱状態になるのも無理はない」といい、「一番不安なのは食糧問題である」とする。インフレの問題、教育の問題、失業の問題、外地の同胞、殊に北鮮から満州の日本人がどうなっているのかの問題、伝染病の問題、いろいろな犯罪が家常茶飯事のように横行する現況を述べる。そしてそれらへのキビキビした対策は何一つ行なわれていないとする。

が、言論の自由、睡眠時間の確保をありがたく思うとして、国語の問題に入っていく。「急を要しないが、日本の将来を考へれば、これが一番大きな問題とも云へる」といい、「吾々は子供から今の国語に慣らされ、それ程に感じてはゐないが、日本語の国語程、不完全で不便なものはないと思ふ。その結果、如何に文化の進展が阻害されてゐたかを考へると、これは是非とも此機会に解決しなければならぬ大きな問題であ」り、「此事なくしては将来の日本が本統の文化国になれる希望はないと云つ

ても誇張ではない」とする。「日本の国語が如何に不完全であり、不便であるかをここで具体的に例証する事は煩はし過ぎて私には出来ないが、四十年近い自身の文筆生活で、この事は常に痛感して来た」というのである。ここまでを読んで、日本語の「如何に不完全であり、不便であるか」を言っても、「具体的に例証」がないのでは読み手には何が何だか分からない。そこで、まず、「五月蠅」(『文藝春秋』、昭20・12)という随筆に着目したい。

これは「国語問題」のいわば先蹤作ともいえるものである。「私」(『志賀直哉』)とその子息の「直吉」の会話から始まっている。「五月の蠅と書いてうるさいと読まずんでせう。考へるとインチキなもんだね」と「直吉」が言う。「私」は「近頃、日本の字や言葉をもう少し整理する必要があるといふやうな事を考へてゐたので、直吉のいふ事に同感した」のであった。ここからは一種の尻取り遊びのようになり、「うるさい」を「煩い」と書くのはいいが「五月蠅」と書くのは確かに「出鱈目」だと思ふが、これもいい加減な「当字」だと思ふ、「インチキ」も俗用のもので、「滅茶苦茶」という言葉も字も変、「滅茶苦茶」を「無闇矢鱈」と代えても変、「自分の

やうに好んで俗語を使ふ者には自縄自縛で手も足も出なくなりさうだ」とするのである。ここまでで、志賀は日本語には「当字」や「俗語」が多いことをいう。そして次に、「一日本人出頭する事」と回覧板か何かにあったのを「一人の日本人」という意味に読んで分らず、読み返して「一日に本人」の意味と分かり、「何所で切つていいか分らぬ不便」で前後を読み直した体験を語る。さらに、「私」の少年時代の友達への手紙で「一日日日を間違へた」とある「一日日日」に「イチニチヒニチ」と仮名が振つてあるのを見て、これは実際口でいう場合で、文章では「日を一日間違へた」と書く、いわば同字異読語が日本語に多く不便だとした例になっているのである。

これと似たようなことは、谷崎潤一郎と志賀直哉の対話「文芸放談」(『朝日評論』、昭21・9)、『夕陽』、櫻井書店、昭35・9所収)でも志賀の発言に現われている。「志賀先生、今後の国語国字の問題はどうなるでせう」という『朝日評論』の発行元である朝日新聞社の「記者」(この人は吉村正一郎で、またこれが奈良で行われたものであったことが、のちの志賀の随筆「太宰治の死」(『文芸』、昭23・10)から判明する。なお、吉村正一郎

の弟に映画監督の吉村公三郎がいた)からの質問に志賀は「この間新聞で寺内元元帥といふのを見てをかしく思つたが、杉山元帥の場合は名前が元といふのだらう。杉山元元帥となるだらう、初めの元が何と読むのかわらないが、兎に角、元で固有名詞、次のは形容詞、その次は名詞の半分、皆違ふだらう。同じ字が三つ重なるねえ、変なものだと思ふ」と言い、また、「止めた」は「とめた」か「やめた」か、どちらでも読めてしまう日本語の不完全さを言っている。そして、「記者」は「生」といふ字は二十七通り読み方があるさうですね」と学のある発言をしている。

私はこの「記者」の発言が大変気になって「生」の二十七通りの読み方を手許にある漢和辞典(『新漢語林』・大修館書店)などで調べてみた。生む(うむ)、生きる(いきる)、生える(はえる)、生活(せいかつ)、たつき、生一本(きいっぽん)、生玉子(なまたまご)、芝生(しばふ)、一生(いっしょう)、衆生(しゅじょう)、生月(いきつき)、生石(おおいし)、生見(ぬくみ)、生原(はいばら)、生費(いけにえ)、生粹(きっすい)、生子(うぶす)、生田(いくた)、生憎(あいにく、あやにく)、生田目(なばため)、生飯(さば、さんば)、生

保内(おほない)、生絹(すずし)、生業(なりわい、すきわい)、これで二十八通り、私はもしルビなしなら三分の二ほどしか正しく読めなかった。また、羽生(はにゅう)、壬生(みぶ)、生う(おう)もあり三十一通り、それ以上あるかもしれないのだ。同字異読語が日本語に多い一つの例であり、不便さは否めないと思つたのである。が、谷崎は「さうかといつて、フランス語やローマ字にするのは中困難だと思ふな」と志賀の国語フランス語化提言などに否定的な発言をしている。とはいえ、ラジオで「火柱」を「クワチュウ」と言っていたり、小学校の先生が「罹患児童」(病気の子供でいいではないか)と言っていたり、「ソーガイソーガイ」と言うので初めは分からなかったが、聞いたら「霜害」だと知った、という難しい言葉づかいをしたがるのは、軍人、役人、教育家、学者の方に多く、文学者は割に使わないと発言している。それでも、志賀は、ローマ字書きやカナ書きには否定的で、自分らは尺貫法で国語フランス語化は自分らの世代はもう駄目だが、日本語は尺貫法に当り、将来の日本のためには、メートル法(「mètre」も「kilogramme」もフランス語である)に当るもの(国語フランス語化)に思い切って切り替えるといい、としている。

また谷崎は、西洋流の哲学の文章などの意味は日本語では出せないとし、翻訳の難しさの問題に話題を移していたのである。

この志賀の「国語問題」が発表されたまさしく同時期に、山本有三が「もじと国民」(『世界』、昭21・4、これは昭和十六年一月二十六日にJ.O.A.Kより放送されたものに口述で結びのことはを付け加えたものであった)を発表している。ここでは「日本の文章」は「かな交じり文」だが「漢字が本体であって、かなは添えものに過ぎない」、「少なくとも、二千字ないし四千字ぐらいの漢字を知らなければならぬ。しかも、日本では一つの漢字に読み方がいくつもあるので、実際には、そのなん倍かの力がなければらくに読みこなすというわけにはいかないのである」といい、国民学校の高等科を卒業した二五五人の生徒の漢字の正しい読み方、書き取りの成績の惨憺たる有様を紹介し、「もじが国民のものになっていない」、文化国家として国語国字問題は重要だとしていたのである。が、ここには、ひたすら日本語、とりわけ漢字の存在、その学習の難しさが強調されているのみをみるだけなのである。

ともあれ、志賀の「国語問題」は次いで、「私は六十

年前、森有礼が英語を国語に採用しようとした事を此戦争中、度々想起した。若しそれが実現してゐたら、どうであつたらうと考へた。日本の文化が今よりも遙かに進んでゐたであらう事は想像できる。そして、恐らく今度のやうな戦争は起つてゐなかつたらうと思つた。吾々の学業も、もつと楽に進んでゐたらうし、学校生活も楽しいものに憶ひ返すことが出来たらうと、そんな事まで思つた。吾々は尺貫法を知らない子供達のやうに、古い国語を知らず、外国語の意識なしに英語を話し、英文を書いてゐたらう。英語辞書にない日本独特の言葉も沢山出来てゐたらうし、万葉集も源氏物語もその言葉によつて今よりは遙か多くの人々に読まれてゐたらうといふやうな事までが考へられる」としてしているのである。

とりわけこの部分、いや志賀の「国語問題」の全般に渡つてだが、鈴木孝夫は手厳しい批判を加えている。「まず彼の言う英語を国語とすれば、日本の文化が進み、従つて戦争も起きなかつたらうという主張は、論理的に見てもおかしい。英語を使う国が過去に於てどれだけ戦争をしたか、また文化の高い国がいつも戦争を避けたわけではないことなど、子供にでも分る事実である」といい、「六十年前に初代文部大臣森有禮の提案に従つて英

語を国語として採用しておいたならば、『万葉集』や、『源氏物語』も、今より遙かに多くの人々に読まれていたろうという真に不可解な議論の進め方である。「これらの古典をよむようになるだろうというのは、どう考えても意味がとれない文章である」としたのであった。

右の引用部のあとに志賀は国語を根こそぎフランス語にしたらどうかという提言をするのだが、ここは戦時下において、かつて森有礼が国語を英語にしていってくれたら自分たちはどんなに仕合わせであったかを述べていて、ここも大変誤解を与えやすい文脈となっている。では志賀の真意はいかなるものだったか。それを探る手掛かりとなるのが、未定稿240「おぼえがき 一 昭和二十六年一月より 大洞台」から始まる四つ目の○印の付いた文章^①のように思われる。以下、要約して紹介したい。

自分は先に「国語問題」という題でこの際、思い切った不完全極まる日本語を廃してフランス語にでも国語を変えてしまうことは「百年の計」として賢いことであろうという意味の提言を書いたがこの考えは今も少しも変わらない。これは、われわれが今からフランス語を話し、フランス文を綴るといふ意味ではなく、これから生まれる日本人のためにも世界の人々のためにもいいという意

味を言ったのである。日本語で書かれた哲学の本が分からないのは哲学そのものも難解なものかも知れないが、それ以上に日本語の不完全さが無理な言葉の使い方をしているためではないかと思う。日本の小説が戯作時代を抜けて芸術として書かれるようになって何十人、何百人の小説家が出たろう。その中で誰一人世界的な作家になった者もない。フランスでもロシアでも米国でさえ新しい作家を出している。日本の国民は文学芸術に決して無關心な国民ではない。然るに誰一人世界的な作家として認められた者はない。それは、才能の問題ではなく、日本語で書かれたものなるが故であると考える。作品は、本統の味は翻訳では味わうことはできない。ちょうど、「生肉」と「冷凍肉」の違いがある。翻訳されると内容の価値まで変わる。作者にとって原文で味わってもらおう以外、作品の本統の読者はないのである。

日本文学芸術は世界に通用するものを持っているが、未だに世界的な作家が出ていないのは不完全な日本語で書かれたためだとしている。翻訳でもいいではないかという考えもあるが、翻訳は「冷凍肉」である。「生肉」でないとその作品の本統の味わいは分らないとするのだ。で、将来の国語として「生肉」に当る言語は日本語

ではなく、フランス語にでもしたらいいと提言したのである。これは将来の日本の文学が世界レベルになるためのもので、「百年の計」によるものと主張したのである。となれば、志賀直哉の文学は翻訳でしか残らないことになる。それでも日本の将来を考えると、自分は構わない、私心のないことが明らかとなる。翻って、森有礼の提言が実現していたら、志賀らは英語を話し、英語で小説を書いていたことになる。そうなれば、志賀らのうち誰か世界的な作家となっていたかもしれないというのも夢想ではなくなる。実は、志賀直哉の「佐々木の場合」と「小僧の神様」は、イギリスのサッドラーという人により、大正十一年に翻訳されていたことが志賀日記（大正十一年一月十三日および三月十七日の項を参照のこと）によって明らかである。その後の反響は芳しいものでなかったとも想像がつく。

ここで、ノーベル文学賞受賞者に志賀は関心があつたかどうか、多分あつたとして、二十世紀前半の主な受賞者を列挙してみよう。ノーベル文学賞初受賞者は、一九〇二年のシュリ・プリュドム（フランス）であり、一九一二年はメーテルリンク（ベルギー人だがフランス語での著作）、一九二二年はタゴール（インド、非西洋人で

の最初の受賞だがベンガル語で書いた詩を自分で英訳しての受賞であつた）、一九一五年はロマン・ロラン（フランス）、一九二一年はアナトール・フランス（フランス）、一九二九年はトーマス・マン（ドイツ）、一九三〇年はシンクレア・ルイス（小説・アメリカ人初の受賞者）、一九三三年はイヴァン・ブーニン（小説・ロシア人最初の受賞者）、一九三七年はマルタン・デュガール（フランス）、一九三八年はパール・バック（アメリカ）、一九四七年はアンドレ・ジッド（フランス）、一九四九年はフォークナー（アメリカ）であつた。これはのちのことになるが、一九六八年の日本人初の受賞者である川端康成は、サイデンステッカーの、「雪国」(Snow Country 一九五六)などの名訳の存在が大きく作用したとはよく知られているところである。

志賀の友人里見弴は、ある時、英語の「One glance love」というのが浮かび、「一目惚れ」として日本語に訳し、造語となつて同名のタイトルの小説を発表している。もし、志賀が英語を使用し高等教育を受けていたなら、この「一目惚れ」の逆のケースを考えると、「英語辞書にない日本独特の言葉も沢山出来てゐたらうし、万葉集も源氏物語もその言葉によつて今よりは遙か多くの

人々に読まれてゐたらうといふやうな事までが考へられる」としたのは、あながち実現不可能なことではなかつたといえまいか。さらに、「恐らく今度のやうな戦争は起つてゐなかつたらう」というのは、戦争全般を指すのではなく、対米英戦は、同じ言語の使用によりコミュニケーションがうまくいって避けられたかもしれないと、その戦時下で想像してみたのではなからうか。志賀直哉の発想は常人とは異なるところがある。鈴木孝夫が言うやうな「子供でも分る」ことは言つてはいいないと見るのである。

では、「国語問題」の肝心の国語フランス語化を述べている部分に注目してみたい。「そこで私は此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、その儘、国語に採用してはどうかと考へてゐる。それにはフランス語が最もいいのではないかと思ふ」といい、「過去に執着せず、現在の吾々の感情を捨てて、百年二百年後の子孫の爲めに、思ひ切つた事をする時だと思ふ」とするのだ。「フランスは文化の進んだ国であり、小説を読んで見ても何か日本人と通ずるものがあると思はれるし、フランスの詩には和歌俳句等の境地と共通するものがあると云はれてゐるし、文人達によつて或

る時、整理された言葉だともいふし、さういふ意味で、フランス語が一番よさうな気がする」ともいう。「国語の切換へに就いて、技術的な面の事は私にはよく分らないが、それ程困難はないと思つてゐる。教員の養成が出来た時に小学一年から、それに切換へればいいと思ふ。朝鮮語を日本語に切換へた時はどうしたのだらう」、「私の子供六人が総てメートル法を使つてゐる中で、私は頑固に尺貫法を使つてゐる。国語がどう変らうとも、私自身は今度の国語以外には出られないが、メートル法になつて小学生の教育が如何に容易になつたかを考へると、子供のため、私の場合でいへば孫の爲めに国語問題はどうしても徹底的に解決して貰ひたいと思ふ」とし、「此際思切つた措置を取らなければ悔を百年千年の後に残す事になる。日本が漢字を入れた時よりも、森有礼が英語採用を称へた時よりも、今の日本は遙かに大きな轉換の時期である」と主張するのだった。

若き日の志賀直哉はモーパッサンを英語の重訳で多読し、やがてアナトール・フランス、レニエ、フローベル、アンドレ・ジッドなどフランス文学に多く触れ、「何か日本人と通ずるものがあると思はれる」としたのでらう。志賀直哉の性格からいっても、不徹底な国語（日本語）

改革よりもこのような徹底的な、丸ごと国語をフランス語にしようという発想は理解できる。その発想の一端を担ったのが志賀直哉の子供の世代がすべて尺貫法からメートル法への移行を果たしていることであった。それは大正期後半から昭和初期にかけて行なわれたのである。

次に、志賀のこの提言から十一年ほどを経過した時点での、志賀直哉、徳川夢声、林謙、辰野隆による座談会「志賀氏を囲んでの芸術夜話」(『随想サンケイ』、昭32・11、『夕陽』、櫻井書店、昭35・9)に注目してみたい。高名なフランス文学者の辰野隆が志賀の文章はフランスの文章に近似していること、「ザットとか、ホイッチで受ける文が少ない。ザットやホイッチで受けるところは、しばしばピリオドにしちやつてる」、「近頃フランス史の教科書を読んでゐながら、志賀さんの文体を思ひ出したんです。その文章は、ボツボツときつてあるんだ。つまり「何何する」「何何した」「何何したであらう」といふふうにはボツボツきつた文章だね。接続詞が頗る少ない」などと発言している。志賀は、国語フランス語化提言を顧み、「あれはみんな、僕が何か思ひつきでさう云つたと思はれてるんだが、さうぢやないんだよ。それは二百年、三百年の後を考へると、さうしておくはうがずつと

いいと思ふ。文学のためばかりぢやないんだ。つまり、組立を二十六字にすると、あとのために、どのくらゐ得か分りやしない。たとへば尺貫法をメートル法に直したために、ズツと子供達の算術が進んだといふからね、「今はもう駄目だが、戦後なら……あのどさくさの最中に決断したら、どのくらゐよかつたと思ふんだね」と発言している。本気のものであったのだ。また、志賀が日本語の「欠点の実例は非常にあるからね」と言うと、林謙が「あります。第一、自然科学のことを日本語で書いたらなんの事か分らない。ところが英語で書くと、実によく分るんですね……大体日本語といふものは、あいまいですよ」と発言している。林謙とは、木々高太郎のことです。大脳生理学者としてパブロフの条件反射理論を日本に紹介する一方、推理小説家として活躍していた。林謙の発言は正しく西洋自然科学(哲学もか)の概念用語にぴったりと合う日本語の語彙がない、そこから自然科学分野を中心とした学問は日本語論文では立ち行かなくなる、というのはこの座談会ですでに指摘されていたことになるのである。

さて、「国語問題」発表時に話しを戻すと、この時期の文部大臣は安倍能成で、先の「三年会」での志賀の仲

間の一人であり、それ以前から二人には親交もあったので、安倍能成の耳にも入っていた、あるいは志賀は安倍に直接話す機会があったとも思われる。が、志賀の提言はいかんせん奇抜すぎたのだろう、その実現へ向けての方策は何ら取られなかったようである。第一に、フランス語の教員の養成といってもそう容易ではないと思える。尺貫法からメートル法への移行の数十倍、いや数百倍もの労力が伴うのではなからうか。それにも関わらず、志賀はいわば私心を捨て、「百年二百年後の子孫のため」とし、また日本が将来、文化国家となっているためにこの提言を行なったのである。

ここでもし志賀の国語フランス語化が実現していたと仮定しても、水村美苗が言うように、〈普通語〉としての英語の台頭により、フランス語は凋落していたのである。だが、今日の日本の英語重視の教育が加速されている現状を見ると、山井徳行に「国語外国語化論」の問題を綿密に論じたものがあり、大いに考えさせられるものがあった。ただ、これからの日本における言語教育では、英語教育も日本語教育もどちらも中途半端なものになるのを私は危惧する。また、志賀は将来的に日本が文化国家としてあるために、国語フランス語化（英語でもよい

と解釈して）を提唱したが、私見では、現況の日本は、通俗・大衆文化の隆盛で、一流の文化国家たりえていないように思われる。

六

志賀直哉は、昭和二十二年二月、日本ペンクラブ会長に一年間の契約で就任した。「若き世代に懇ふ——ペンクラブ講演会挨拶——」（『社会』、昭22・9、同年六月二十六日の講演会の「開会の辞」として書いたもの）によれば、日本は戦争を起こし、敗れ、政治的、経済的に三等国、四等国に落ちぶれたが、そういう日本が文化的にだけ一等国並みにとどまっていられるかどうか、正直、少し疑いを持っていると言う。文化的に肥るにはどうしても外国から栄養を摂る必要があるので、外国のいい書物の翻訳に公正な批判をして会でいいものに折紙をつけるようなことをしてほしいと要望している。日本は昔から文化的に外国に誇っていいような優れた人をたくさん出して、具体的には、俵屋宗達、井原西鶴を世界的にオリジナルでかつ一流としている。そして、ひろい意味での教育の重要性をいい、文化国家建設のためのいわば

精進を望んだのであった。

随想「わが生活信条」(『中央公論』、昭24・11)には、重要な提言が含まれていると思う。志賀は、小泉信三氏の「読書雜記」を読んで、エドワード・グレイが幸福について言っていることを面白く思ったとする。グレイは人間の幸福の条件を四つ、「第一、自分の生活の基準となる思想」「第二、良き家族と友達」「第三、意義のある仕事」「第四、閑を持つ事」を挙げている。志賀はこの四つの条件の中で「閑を持つ事」は見落とすかも知れないが、面白く思ったとする。それで、科学が無制限に発達することは困るといふ。というのは、人間の徳性というものは科学の進歩に伴って進歩しないものだからだとする。飛行機の発明などは人間を大変不幸にしていると言ふ。科学の進歩でそれを悪用しないだけの徳性を持つていけばいいのだが、と懸念する。科学の進歩で地球は段々狭くなる。となれば、人間は益々忙しくなり、時間に余裕がなくなる。「閑を持つ事」の幸福の条件が失われると言いたげなのだ。人間が頼り得る確かなものは矢張り自然だとしている。その他にも、学問や芸術に携わるものは「自由」がないと成り立たない、「国家」は、世界国家などうまく出来れば一番いいし、無政府でうまく

く行けばそれもいいと思う、などとしているのである。

現在の視点からこの随想を読めば、志賀の懸念が見事に的中したようにも感じられるのは私だけであろうか。目覚ましい科学の進歩により、いろいろと多方面で便利になった反面、地球は狭くなり、多くの人間は多忙を強いられ、「閑を持つ事」という幸福の一つの条件が失われてしまったといえまいか。科学の進歩が人類の平和に寄与するのであればいいが、人間の徳性の進歩がないままに科学だけが進歩し(自然破壊が起こる)、科学が悪用されるといふ不安を現代人は常に持っているのではなからうか。また、高遠すぎるかもしれないが、志賀はコスモポリタニズムの持ち主であったこともこの随想文から読み取れる。

随想「閑人妄語——「世界」の「私の信条」の為に——」(『世界』、昭25・10)は、「わが生活信条」の延長線上にあるものと位置づけられる。今の時代では色々なものが進み過ぎて手に負えず分からずにいる。とりわけ「思想の対立」と「科学の進歩」である。民主主義と共産主義の対立、両方がいいものならかくも対立するものなのか。対立の解決を「武力」に求めるといふのは、思想も政治もなく、最初から腕力で争う動物の喧嘩と何ら選ぶと

ころはないと嘆く。また、科学（原子力など）の場合に限り或る限界を予め決めておいて、それを超えない範囲で進歩させて貰うわけには行かないものかとする。動物出身である人間の思い上がり、それはいつか自然から罰せられる、罰せられつつあるように思えるという。動物出身であることを弁えない人間のいわばその分際を忘れての進歩のあり方、それは盲点で、自らを滅ぼすことになるのではないかとするのである。

前者の「思想の対立」は、志賀のコスモポリタニズムが根底にあるだろう。その対立の解決を「武力」に求めては動物の喧嘩と同じだというのが、今日の視点からいって、世界各地で紛争も絶えず、テロの脅威、勃発があり、コスモポリタニズムの理想の困難さを思わせる。

後者の「科学の進歩」は、原発事故にも象徴され、その歯止め効かなくなった「進歩」は、人類滅亡の危機感さえ与えつつづけるのである。

《注》

- (1) 栗原俊雄『特攻——戦争と日本人』（中公新書・中央公論新社、二〇一五・八）
- (2) 保坂正康①『あの戦争は何だったのか』（新潮新書、

新潮社、二〇〇五・七）②『東條英機と天皇の時代』（ちくま文庫・筑摩書房、二〇〇五・十一）

(3) 『志賀直哉全集 補巻二』（岩波書店、二〇〇一・十二）

(4) 吉田潤生『志賀直哉の戦中戦後』（『國文學』、一九七六・三）

(5) 福永文夫『日本占領史1945-1952』（中公新書・中央公論新社、二〇一四・一二）

(6) 鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』（新潮選書・新潮社、一九七五・三）

(7) 『志賀直哉全集 補巻二』（岩波書店、二〇〇一・十二）
水村美苗『増補 日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』（ちくま文庫・筑摩書房、二〇一五・四）。

親本は『日本語が亡びるとき』（筑摩書房、二〇〇八・

七）

(9) 山井徳行①「国語外国語化論の再考Ⅰ——森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について——」（『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第50号、二〇〇四・三）②「国語外国語化論の再考Ⅱ——森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について——」（『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第51号、二〇〇五・三）③「国語外国語化論の再考Ⅲ——森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について——」（『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』第52号、二〇〇六（平18）・三）